

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 29 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22390445

研究課題名(和文)患者・家族を対象とした精神看護介入のニーズ分析とプロトコール開発

研究課題名(英文) Needs assessment and development of care-protocol by Psychiatric and Mental Health Clinical Nurse Specialist for patients and families

研究代表者

野末 聖香 (Nozue, Kiyoka)

慶應義塾大学・看護学部・教授

研究者番号：10338204

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,600,000円、(間接経費) 3,480,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、精神看護専門看護師が裁量範囲を広げて実施することが期待される介入を特定し、ケアプログラムを開発、実践し、効果を検証することである。医師と看護師を対象にデルファイ法により介入を特定し、統合失調症患者の幻聴に対する行動マネジメントとがん患者のうつ傾向を改善するケアプログラムを開発した。統合失調症患者87名を対象に行動マネジメントプログラムの無作為化比較試験を、血液疾患患者30名、がん患者70名を対象にうつ傾向改善プログラムの前後比較、無作為化比較試験を実施したところ、ケアプログラムを用いた患者の方が有意に幻聴やうつが改善し、介入効果が検証された。

研究成果の概要(英文)：This study was to identify the care that Psychiatric and Mental Health Clinical Nurse Specialist (CNS) could expand their roles and to test effectiveness of care by CNS. At first we identified the intervention that other professionals expected CNS to implement through Delphi technique. Then three types of research on those interventions were implemented. One was randomized controlled study of behavioral management program for eighty-seven schizophrenic patients with auditory hallucination. In intervention group, patients could control their auditory hallucination compared with that of control group. The second research was quasi-experimental study for thirty blood cancer patients. Mental states of them were improved significantly. The third one was randomized controlled study for seventy cancer patients. Patients of intervention group were improved their depression and anxiety significantly compared with that of control group.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学、地域・老年看護学

キーワード：専門看護師 プロトコール ケアプログラム 介入研究 幻聴 うつ 統合失調症 がん

1. 研究開始当初の背景

近年、医療ニーズは多様化・複雑化し、さらに医師不足や医療の地域格差、慢性疾患の増加や在院日数の短縮化により、効率的で質の高い医療サービスへの国民の期待は高まっている。このような保健医療を取り巻く状況を背景に、厚生労働省は平成 22 年 3 月に「チーム医療の推進に関する検討会」報告書を取り纏め¹⁾、チーム医療を推進するにあたり専門的な教育を受けた看護師の役割拡大への期待について言及した。米国においては、Nurse Practitioner や Clinical Nurse Specialist などの高度看護実践家のケアにより患者の症状や QOL の改善が認められている²⁾³⁾。日本においても専門看護師 (Certified Nurse Specialist (以下 CNS)) が高度看護実践家として活動している。そして精神看護分野における CNS のケア効果として、患者の病状、日常生活・社会生活機能の改善、病状悪化の予防等の効果があることが報告されている⁴⁾。CNS はケア困難な患者への直接ケア、治療チームへのコンサルテーションや調整、治療やケアの質を向上させるための教育や研究、倫理的問題への調整機能を担い、これらの介入の成果も蓄積されてきている⁵⁻⁹⁾。今後は、保健医療を取り巻く状況や国民や社会の医療ニーズに応じて、安全で質の高いケアを、効率的に提供するために、CNS の担いする役割や機能をさらに拡大し、有効なケアプロトコルを開発し実践することが重要な課題である。

2. 研究の目的

本研究は、精神医療分野における高度看護実践家としての CNS に期待される役割と裁量範囲を特定し、その実践プロトコルを開発して効果を検証することを目的とした。具体的には以下の 3 つの研究課題を設定した。

(1) 精神看護 CNS (精神科看護 CNS とリエゾン精神看護 CNS) が裁量範囲を広げて担いする介入を特定する。

(2) 精神科看護 CNS による、統合失調症患者の幻聴に対する行動マネジメントプログラムを開発して実践し、介入の効果を明らかにする。

(3) リエゾン精神看護 CNS による、うつ傾向にある身体疾患患者に対するケアプロトコルを開発して実践し、介入の効果を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 専門性の高い看護師が裁量範囲を広げて担いする介入を特定するために、精神看護 CNS と協働した経験のある医師、看護師と、CNS とを対象に、CNS が関わった患者像、介入の効果、今後、どのような役割拡大を期待できるか等についてインタビュー調査とその結果をもとに 2 回のデルファイ法による質問紙調査を実施した。

(2) 上記(1)の結果に基づき、専門性の高い看護師が担うことが可能で、かつ患者のニーズが高いケアとして、以下の 2 つを特定し、ケアプロトコルの開発およびその評価を行った。

Buccherri らが開発した統合失調症患者の幻聴に対する行動マネジメントプログラムを日本語版に修正し、CNS による週 2 回、計 10 回のセッションを実施した。対照群には、病棟看護師が再燃・再発予防のための心理教育を、1 週間に 1 回 45 分で全 5 回実施した。評価は介入前、介入後、終了 3 ヶ月、6 ヶ月に実施し、評価の指標は、PANSS (病状)、幻聴特性質問紙 (CAHQ: 幻聴の頻度・大きさ・コントロール)、幻聴の不快感測定質問紙 (UVQ)、対処行動リスト (List of Strategies, LS) を用いた。分析は SPSS (VER21.0) を用い、ノンパラメトリック検定と質的内容分析を行った。

身体疾患患者のうつ傾向を改善するためのリエゾン精神 CNS によるケアプロトコルを開発した。このプロトコルは身体疾患を合併したうつ状態の患者へのケアガイドラインや先行研究を基盤に作成したもので、週 1 回、全 4 回のセッションからなる。介入内容は、信頼関係の構築、アセスメントと目標共有、抑うつ状態の理解、薬物療法の理解、抑うつ状態への対処方法の検討、対処スキルの強化等から成る。介入の評価は、以下の 2 つの調査により行った。

-1 慢性疾患を有し、うつ傾向にある患者へのリエゾン精神看護専門看護師による介入前後の不安およびうつ得点の比較

-2 化学療法を受け、軽度から中等度のうつ傾向にある患者を介入群とし、うつの理解と対処に関するパンフレットによる心理教育群を対照群とするランダム化比較試験

評価の指標は、いずれも PHQ9、HADS、SF-8 の 3 つの尺度を用いた。

なお、いずれの調査も、研究者の所属する大学および対象施設の研究倫理委員会で承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1) 結果

インタビューおよびデルファイ法による精神看護 CNS が裁量範囲を広げて担い得る介入の特定

インタビュー対象者は精神科領域の医師、看護師、精神科 CNS 計 32 名および一般科の医師、看護師、リエゾン精神 CNS 計 67 名、総計 99 名であった。精神科看護領域で抽出された介入内容は 19 項目、リエゾン精神看護領域で抽出された介入内容 13 項目であった。これら項目の重要度と優先順位について、デルファイ法質問紙調査 (第 1 回目) を行った。対象者はインタビュー調査対象者に加え日本看護協会に登録公開している CNS52 名 (2011 年 1 月時点) の計 151 名で、回収率は

精神科看護領域 43 名(74.1%)、リエゾン精神看護領域 63 名(67.7%)であった。回答から介入対象と介入内容を絞り込み、さらにデルファイ法による質問紙調査(第2回目)を実施した。精神科看護領域 46 名(回収率 79.3%)、リエゾン精神看護領域 65 名(回収率 69.9%)から回答を得た。分析の結果、精神科における CNS には、再入院を繰り返す患者や症状コントロールの困難な患者への病状・ストレス管理、日常生活の再構築、精神療法、退院支援が期待されていることが分かった。また、一般科におけるリエゾン精神 CNS には、希死念慮やうつ状態、適応障害の患者に対する危機介入、精神療法による介入が期待されていることが分かった。これらの結果をもとに米国の CNS、Nurse Practitioner を交えてディスカッションを行い、最終的に開発する介入プロトコル項目として、精神科看護領域は「統合失調症患者の幻聴に対する行動マネジメントプログラム」、リエゾン精神看護領域は「化学療法を受ける患者のうつ傾向改善のためのケアプロトコル」に絞り込んだ。

統合失調症患者の幻聴に対する行動マネジメントプログラムの評価

対象者は、研究に同意の得られた統合失調症患者で、介入群 42 名、対照群 41 名の合計 83 名であった。介入群の平均年齢は 43.5 歳、対照群は 44.8 歳であり、平成 23 年 1 月から平成 25 年 3 月まで実施した。

両群間で発症からの期間、性別、仕事の有無、同居の有無に差はみられなかったが、開始時の入院月数が、介入群 3.1 か月、対照群 1.5 か月と介入群の入院月数が有意に長かった ($U=375.0, P<0.01$)。さらに介入群の病状が対照群より重くリスペリドン換算も多かった。両群とも外来への移行率が 82.9-83.3%と高く、特に介入群の外来移行率が高かった(83.3%)。両群とも介入後に幻聴特性、声の不快感レベルが改善していたが、終了 3 か月後、6 か月後で、介入群に有意な改善が見られた ($u=209.5-453.5, p<0.05$)。また介入群のうちの 31 名(73.8%)はプログラムについて「かなり役に立った」と感じており、対照群の 17 名(41.5%)に比し有意に多かった ($\chi^2=11.2, P<0.01$)。また具体的な対処行動として介入群では「歩く」が最も多く用いられており、次いで「人と話す」「薬を飲む」「リラックスする」「眠る」「無視する」「イヤホンをつける」の順で用いられていた。

身体疾患を有する患者のうつ傾向改善のためのリエゾン精神 CNS による介入の評価

-1 介入前後のうつおよび不安得点の比較

研究対象者は、血液疾患および肺がんと診断され、身体的治療を受けている入院患者 30 名であった。介入前の不安およびうつ得点から、中等度のうつ、不安状態と評価された。介入前後の得点比較から、PHQ9(うつ尺度)と、HADS(うつ、不安尺度)の不安およびう

つ得点、合計得点のいずれもが有意な改善を示していた ($Z=-0.4 \sim -2.9, P<0.01$)。さらに痛み、日常生活機能、身体機能に関連した QOL も有意に改善が認められた ($Z=3.2, P<0.01$)。

-2 ランダム化比較試験を用いたリエゾン精神看護専門看護師による介入の効果

研究対象者は、3つの医療機関において血液疾患および肺がんと診断され、化学療法を受けている患者 70 名であった。介入群 34 名、対照群 36 名を無作為に割り付けた。

介入前後の PHQ9、HADS、SF-8(生活の質: QOL)得点の比較から、介入群、対照群ともにうつや不安得点の有意な改善が示された ($Z=4.21 \sim 13.19, p<0.01$)。一方、介入前後のうつおよび不安得点の差をみると、PHQ9 では介入群 -5.4、対照群 -2.5 点 ($t=-3.79, P<0.01$)、HADS 不安では介入群 -3.8、対照群 -1.8 ($t=-3.11, P=0.003$)、HADS 合計では介入群 -7.1、対照群 -3.0 ($t=-3.43, p=0.001$) といずれも介入群の方が有意に改善していた。また介入群では、SF-8 全項目が介入後で有意に改善していたが、対照群においては、身体機能や活力の領域で改善は認められなかった。

さらに介入後の抑鬱状態を規定する因子の抽出を目的に、介入後の PHQ9 得点を従属変数とし、介入後の PHQ 得点との相関関係が認められた変数を独立変数とし、ステップワイズ法を用いた重回帰分析を行った。その結果、介入後の PHQ9 得点に影響する因子は、介入後の HADS 不安得点であった ($\beta=0.79, R^2=0.635, p<0.01$)。

(2) 考察

本研究では、精神看護 CNS が担うことが期待されている実践内容について医師、看護師、CNS を対象としたインタビューおよびデルファイ法により優先度の高い実践を抽出した。これにより日本の医療現場において高度実践看護師に期待される役割が具体的に明確になった。これらの介入について、エビデンスに基づく介入プロトコルを開発し、また米国で効果が検証されたプロトコルの日本語版を作成した。これまで日本の精神看護分野において無作為化比較試験による介入研究はほとんど実施されていないが、本研究で無作為化比較試験を実施し、エビデンスレベルの高い介入研究を行い、一定の効果が検証できたことで、幻聴に苦しむ患者、抑うつ状態にある一般身体疾患患者の精神状態の改善に貢献しうる看護実践プロトコルが開発出来た。今後はプロトコル内容を精練し一般化に取り組むとともに、CNS を対象としたプロトコルに基づく実践トレーニングについて検討する必要がある。

引用文献

- 1) 厚生労働省(2010). チーム医療の推進について(チーム医療の推進に関する検討会

報告書)。

<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/dl/s0319-9a.pdf>

- 2) Baldwin, R., Pratt, H., Goring, H., Marriott, A., Robert, C. (2004). "Does a nurse-led mental health liaison service for older people reduce psychiatric morbidity in acute general medical wards? A randomized controlled trial" Age and Ageing, 33, no5, 472-478.
- 3) Kurlowicz, L.H. (2001). "Benefit of psychiatric consultation-liaison nurse interventions for older hospitalized patients and their nurses". Archives of Psychiatric Nursing. 15, 53-61.
- 4) 片平好重他(2004). 精神看護専門看護師の直接ケア技術の開発及び評価に関する研究 - 最終回, 看護, 56(2), 84-87.
- 5) 野末聖香, 宇佐美しおり, 福田紀子他(2004). 精神専門看護師によるコンサルテーションの効果, 看護, 56(3), 70-75.
- 6) 宇佐美しおり, 野末聖香, 片平好重ほか(2005). 各分野での CNS の活動アウトカム精神専門看護師の活動成果に関する研究 直接ケア技術とコンサルテーションの機能に焦点をあてて, 臨床看護, 31(11), 1622-1631.
- 7) 宇佐美しおり他(2008). 慢性疾患患者の不安や抑うつ軽減を目的としたリエゾンナースによる精神的支援の評価に関する研究, 平成 17-19 年度文部科学省研究費基盤研究(B)研究成果報告書(代表野末聖香), 2008.
- 8) 宇佐美しおり他(2010). 精神障害者への Assertive Community Treatment (ACT) の評価に関する研究-ケースマネジメントにおける精神看護専門看護師の役割, 熊本大学医学部保健学科紀要, 6, 84-87.
- 9) 宇佐美しおり他(2009). 症状が不安定な精神障害者の自立支援における退院支援ケア・パッケージを含む集中型包括ケア・マネジメントモデルの開発, インターナショナル・ナーシング・レビュー, 32(1), 88-95.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計5件)

宇佐美しおり, 野末聖香, 安藤幸子, 上野恭子, 福田紀子, 石井美智子: 統合失調症患者の幻聴に対する精神看護専門看護師による行動マネジメントプログラムの評価に関する研究. 第33回日本看護科学学会学術集会, 2013年12月6日(大阪).
宇佐美しおり, 野末聖香, 福田紀子, 石井美智子, 安藤幸子, 上野恭子: 中等度の抑うつ・不安を有する身体疾患患者への CNS 介入の評価. 第33回日本看護科学学会学術集会, 2013年12月6日(大阪).
石井美智子, 野末聖香, 宇佐美しおり, 安

藤幸子, 上野恭子, 平井元子: 精神看護専門看護師に期待される介入内容の分析 デルファイ調査の結果から. 第32回日本看護科学学会学術集会, 2012年12月1日(東京).

宇佐美しおり, 安藤幸子, 野末聖香, 上野恭子, 平井元子, 石井美智子: 精神看護専門看護師の役割と裁量範囲に対する意識調査 第1報: 精神科病院で働く看護管理者、医師、精神看護専門看護師を対象に. 第31回日本看護科学学会学術集会, 2011年12月3日(高知).

平井元子, 宇佐美しおり, 安藤幸子, 上野恭子, 野末聖香, 石井美智子: 精神看護専門看護師の役割と裁量範囲に対する意識調査 第2報: 一般病院で働く看護管理者、医師、精神看護専門看護師を対象に. 第31回日本看護科学学会学術集会, 2011年12月3日(高知).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野末 聖香 (NOZUE KIYOKA)
慶應義塾大学・看護医療学部・教授
研究者番号: 10338204

(2) 研究分担者

宇佐美 しおり (USAMI SHIORI)
熊本大学大学院・生命科学研究部・教授
研究者番号: 50295755

安藤 幸子 (ANDO SACHIKO)
神戸市看護大学・看護学部・教授
研究者番号: 80285353

上野 恭子 (UENO KYOKO)
順天堂大学大学院・医学研究科・教授
研究者番号: 50159349

福田 紀子 (FUKUDA NORIKO)
慶應義塾大学・看護医療学部・講師
研究者番号: 50611050
(平成23年度から)

石井 美智子 (ISHII MICHIKO)
慶應義塾大学・看護医療学部・助教
研究者番号: 10583304

平井 元子 (HIRAI MOTOKO)
慶應義塾大学・看護医療学部・助教
研究者番号: 20458954
(平成23年度まで)

(3) 連携研究者 該当なし